

なぜ、「百濟」は「くだら」と発音するのか？

メモ)鉄本 2023.09.30

「百濟」は、ハングルでは「Paek-tche(ペックツェエ)」である。漢字をそのまま読めば、「ひゃくさい」である。一方、「新羅」は、ハングルでは「Shil-la(シルラ)」であり、日本語の発音の「シラギ」に近い音になっている。なぜ、「百濟」は「くだら」なのか、調べてみた。

『古語大鑑 第2巻』東京大学出版会 を引くと、【補説】に次のようにある。

「くだら」と第二音節目を濁音に読んだ例としては明応本節用集が早く、この頃までは「くたら」であったであろう。「くだら」の訓の語源には江戸時代以来諸説あるが、三国史記の地理志にある郡名「**居陀**」又は「**居陀耶(羅)**」に基づく説が有力であろう。これによれば、純粋な和訓とはならず、「クタラ」と見出し語を立てるべきこととなる。尚、日本書紀の古訓では「百濟」のみならず「扶余(継体期23年)」にも「クタラ」を当てている。

(筆者注記) ・明応は 1492 年-1501 年。

・『三国史記』は朝鮮最古の歴史書。金富軾らによって 1145 年に編纂された。

『日本国語大辞典 第4巻』には、次のようにある。

～略～ 馬韓地方に原名「**居陀羅**」と推定される「居陀」という地名があり、これがこの地方の代表地名となり、百濟成立後、百濟の訓みになったという説が最も合理的か。～中略～
語源説として、「クは大の意。タラは村落の義」と説明。

「居陀羅」をハングルで表記すると、「거타라」となり、発音すると、「Geo-tala(コッタラ)」となり、「くたら」の発音に近くなる。

(注記)HP: [漢字のカナーハングル対照表 \(biglobe.ne.jp\)](http://biglobe.ne.jp)を使用して漢字ハングル変換を行った。

なお、郡名の「居陀羅」が現在のどの場所に当たるのかは不明。

馬韓は BC2世紀末から4世紀にかけて朝鮮半島西南部に存在した部族集団で、50余りの国が存在した。その1つに**伯濟国**があり、これが周辺の国々を統合し後の百濟になったといわれる。

【別の説】

『三国史記』には、百濟王室は**扶余**に淵源を持つ高句麗系として記述されている。扶余は百濟の王都で、近くに「白馬江」が流れ、その河口付近は「白村江の戦い」の舞台でもある。現在、扶余地域は世界遺産になっている。旧王城の泗沘城(サビソン)付近には「**구드래**」(Gudeulae **クドゥレ**)という地域があり、この地名が「くだら」に転訛したという説もある。

例:「クドゥレ彫刻公園」、「クドゥレ商店通り」、「クドゥレ渡船場」など
「白馬江」からは、泗沘城に出入りする大きな渡船場があったといわれている。

【3世紀初の朝鮮半島】



【6世紀の朝鮮半島】



さらに、『日本大百科全書』 小学館 を引くと次のようにある。

～略～ 日本では大村などを意味する朝鮮の古語を訓読して「くだら」という。その前身は馬韓(ばかん)の伯濟(はくさい)国で、4世紀前半に建国した。～以下、省略～

翻訳ソフト(google)で、「大きな国」を翻訳すると、「大きな国」 ⇒ 「큰 나라」となり、
発音は、「kuen nala(クン ナラ)」である。音としては、「くだら」に近いが？

以上をまとめると、次のようになる。

- ①郡名「居陀羅(コッタラ)」が国名の「百濟」と結び付き、音が「くたら」に転訛した説；
- ②扶余付近の地域名「クドゥレ」が国名の「百濟」と結び付き、音が「くだら」に転訛した説；
- ③「百濟」を美称する代名詞としての「大きな国」(クンナラ)が「くたら」に転訛した説；

いずれの説も決め手がないが、倭人が百濟に行き来するなかで、「くだら」という言葉が倭人の中に定着し、「百濟国」全体を示す言葉になり、「文字としての百濟」と「音としてのくだら」が結び付いたと推定できる。
なお、『日本書紀』における「百濟」の表記は、神功皇后の条から表われている。

【よく似た用字の例】

文字としての「百濟」に、音としての「くだら」を当てはめる用字は、「大和(=やまと)」にも見られる。

なぜ、「大和」を「やまと」と読むのか？

「やまと」の語源には諸説あるが、次のように考えられる。

- ①元々「やまと」は奈良の一地域の地名であったが、ヤマト王権の拡がりと共に日本全体を指す地名となった。
- ②中国からは「倭」と呼ばれていたが、卑字「倭」を好字の「和」に変え、さらに美称の「大」を付け「大和」とした。
(注釈)713年(和銅6)に元明天皇によって、「諸国郡郷名著好字令」が出され、全国の地名が漢字2文字(好字二字令)に統一されることとなった。
- ③地名を表す音の「やまと」に、表意文字の「大和」を当て、「大和」=「やまと」が成立した。

次のような例もある。

- ・『古事記』(712年)： 「倭(やまと)」、「大倭(おおやまと)」と読ませている。
- ・『日本書紀』(720年)： 「倭」、「大倭」、「日本」、いずれも読みは「やまと」である。
←「神代 上」に、「日本」を「ヤマト」と読むと注記されている。

「廼生大日本日本、此云^{やまと}耶麻騰。下皆效此豊秋津洲」(赤字部分が注記)

『日本書紀』には、「大和」という文字は表れていない。

【国号「日本」と畿内の大和国名の変遷】 日本全体への呼称と畿内のヤマトへの呼称が混然としている。

- ・702年(大宝2) 遣唐使栗田真人が「日本国使」を名乗り、唐が認める。(『続日本紀』)
- ・737年(天平9) 聖武天皇の時、「大養^{おほやまと}徳國」と改め
- ・747年(天平19) 大倭國の旧字に変更
- ・752年(天平勝宝4) 大倭國を大和國に改め
- ・10世紀前期に編纂『倭名類聚鈔 國郡部』 畿内國第五十二「大和 於保夜萬止^{おほやまと}」と記述
- ・10世紀中頃に編纂『旧唐書』 「倭国伝」から「日本国伝」へ別項立て

以上